

市川福升

(いちかわふくしょう)

元市川少女歌舞伎劇団員

基本データ

取材日：二〇一五年五月三十一日

取材場所：[白雲座](#)（岐阜県下呂市門和佐）

取材者：舘野太朗・神山彰・日比野啓

取材立ち合い：細江和彦

編集・構成：舘野太朗

監修：市川福升・細江和彦

イントロダクション

市川少女歌舞伎の全盛期を捉えた映画がある。一九五七年制作の『ひばりの三役競艶雪之丞変化』がそれである。主演の美空ひばりは雪之丞、闇太郎、雪之丞母お園の三役をつとめ、市川少女歌舞伎は雪之丞率いる一座として劇中劇に出演している。ひばり版『雪之丞変化』では、雪之丞が女であることを隠していることが趣向のひとつとなっているため、劇中劇の相手役が少女歌舞伎であるというのは、厳密には矛盾した配役である。しかしながら、当時二十歳のひばりと体格的な釣り合いがとれており、少女だけで演じる歌舞伎の魅力の一端を知ることができる。また、劇中の雪之丞一座は旅芝居で評判をとり、ついに江戸の中村座へやってきたということになっている。地方巡業から都市の大劇場に進出し

た市川少女歌舞伎と雪之丞一座の境遇は似ており、当時の観客も両者を重ねあわせて見ていたのではないだろうか。

市川少女歌舞伎は、一九六〇年に「市川女優座」と改称する。この改称は、年長の「少女」たちが二十歳を越えたことが理由であった。このときに浜松座との専属契約を解除し、独立劇団となった。改称後には、幹部の退団、大劇場公演の減少など、劇団は徐々に苦境に追い込まれる。そして、一九六二年九月の読売ホール公演を最後に、商業公演を止めてしまった。市川少女歌舞伎が大劇場から姿を消してからも、東海地方を中心に散発的な短期公演を継続していたことは、あまり知られていないだろう。例えば、一九八四年に愛知県春日井市の東部市民センターで一日限りの公演を行っており、その様子は雑誌『演劇界』にも掲載された。地方の非商業的な公演のため、全国メディアで取り上げられる機会は減ったが、市川少女歌舞伎は消えたわけではない。残念ながら、近年は市川少女歌舞伎としての公演が行われていないため、彼女たち自身の演じる歌舞伎を実際に見るのは難しい状況にある。しかし、かつての「少女」たちは、各地の地芝居や子ども歌舞伎の指導者として精力的に活動しており、その藝風は現在も継承されている。地方で生まれた少女歌舞伎は、大都市での公演を経て、ふたたび地方に回帰したといえよう。

さて、市川少女歌舞伎の特徴として、上演したレパートリーの幅広さをあげることができるだろう。初期からの劇団の指導者であった市川升十郎は、もともと地芝居と旅芝居の役者として活動していたため、地方で好まれるような義太夫狂言を得意としていた。東京に進出した当初は、昼夜を通じてすべての出し物が義太夫狂言であった。義太夫狂言ばかりが続くことは、地芝居では珍しいことではない。しかし、大劇場の観客たちには馴染まなかったであろう。以後、劇団はレパートリーの拡充に努めてゆく。なかでも、成田屋一門として歌舞伎十八番から『勧進帳』と『鳴神』を頻繁に上演したことは特筆に値するだろう。その他にも、新歌舞伎では『修善寺物語』、『鳥辺山心中』など、歌舞伎舞踊では『釣女』、『茨木』などを取り入れ、小芝居や地芝居とは一線を画す外題を揃えていった。そうした外題の上演にあたっては、成田屋宗家の市川三升、市川海老蔵はもちろん、市川寿海、尾上松緑、藤間藤子など、第一線級の指導者を迎えた。当時としても破格の待遇であり、彼女たちに対する周囲の期待の高かったことがうかがえる。また、歌舞伎界以外から、文楽座の大夫と三味線や、女流義太夫の竹本三蝶一座が特別出演したこともあった。

指導や共演という関係ではないが、月形龍之介、中村錦之助、大川橋蔵など映画俳優たち

が市川少女歌舞伎を鼻祖としていたことも興味深い。劇団の全盛期であった一九五〇年代は、日本映画に勢いのあった時期と重なる。南座公演の際には、撮影所から俳優たちが芝居を見にやってきたという。ゴシップめいた話題ではあるが、両者の交遊関係もいまや戦後芸能史の片隅に記録されるべき事柄ではないだろうか。

今回お話しを伺った市川福升さんは、最初期から市川少女歌舞伎に参加され、おもに線の太い立役をつとめられた。福升さんの当たり役は、なんといっても『勸進帳』の弁慶で、劇団の代名詞として各地で何度も上演された。結婚を機に岐阜県に移られ、現在は、下呂市の鳳凰座歌舞伎、白雲座歌舞伎、白川町の佐見歌舞伎の三か所で地芝居の振付をされている。今でも弁慶役者の雰囲気は健在で、地芝居に出演する子どもたちにとっては少し厳しい先生のような。取材は苦手とのことだったが、当時の筋書や写真を持ち寄ってリラックスした雰囲気でお話してくださった。

聞き書きは福升さんの指導されている白雲座の収蔵庫で実施した。白雲座は重要有形民俗文化財に指定されている芝居小屋である。白雲座歌舞伎保存会の細江和彦会長に取材の仲介および立ち合いでご協力いただいた。この場で感謝申し上げたい。

市川少女歌舞伎前史

神山：こちら〔岐阜県飛騨地方〕へは昔から来てらっしゃるんですか。

福升：〔この地域には〕興行師さんがいて、各務原〔岐阜県各務原市〕、金山〔岐阜県下呂市金山町〕、下呂〔岐阜県下呂市〕、萩原〔岐阜県下呂市萩原町〕をまわって、最後が高山〔岐阜県高山市〕。それが終わると、九州へ行くとか、四国へ行くとか。宗家から名前をもらうまえ、子どもころの巡業ですよ。

館野：そんなに昔からこちらには来てらしたんですね。

福升：はい。教えるのではなくて、劇団でね。

神山：まだ十代でしょう。昭和二十二、三年〔一九四七、一九四八〕ですかね。

福升：十一、二歳だね。老人会とか敬老会なんかで一幕だけ年寄りに見せて、喜ばれて、帰ってくるということをやっていたんです。素人さんに習ってね。

神山：その素人さんというのは最初のころに〔市川少女歌舞伎の女優たちに〕教えていた古川芳一さんという人ですか。

福升：そう。私らみんな、それぞれの先生のところで踊りをやっていたんです。あるとき

、各先生のお弟子さんが集まって、豊川の公民館か公会堂で発表会をして、私は長唄の『供奴』を踊ったんです。古川さんが『供奴』の顔してくれて[化粧をしてくれて]、そのときに古川さんに「歌舞伎やらないか？」って誘われた。私は、「だめ」って言ったんです。『供奴』の「してこいな」が言えなくて、何回先生に叱られたか。そんな人が歌舞伎なんてとんでもないということで、最初は断ったんです。

でも、父親もおじさんも田舎歌舞伎に出て[『奥州安達原』の]袖萩をやったりしていてね。私に「[袖萩の娘の]お君やれ」なんて言ったこともあるんだけど、「お君なんてやらない！」なんて言っていた。それが後になって市川少女歌舞伎で私が活躍するようになったものだから、おじさんが、「よく歌舞伎に行ったなあ」ってびっくりしたぐらいでね。

だから、古川さんに誘われたのが最初のきっかけ。その後に[市川]美寿次さん・升代さん[姉妹]のお母さんとうちの父親が親しくしていたんで、「うちの娘も[歌舞伎を]やっているで、やらないか」ということで、稽古場へ行ったの。(写真を見せて)この写真の料理屋の二階で稽古していたんです。

館野：美寿次さん・升代さんのご実家ですね。

福升：そうそう、「遊喜」っていう店屋。古川さんは、義太夫では竹本錦太夫っていう藝名でね。『野崎』なんかを語って、私たちにも教えてくれとった。そうしたら、当時は市川團吉とっていた升十郎さん[市川升十郎(一九一三 一九九八)]が巡業を終えて帰ってきたの。升十郎さんは、豊川のちょっと在に入った平尾[愛知県豊川市平尾]っていうところの人で、[升十郎の]お父さんは校長先生とか、村長さんとかって偉い人[升十郎の父・中田悦次は升十郎の出生時は教職にあった。(市川升十郎『かぶき人生』一九八三、豊文堂)]なんだけど、百姓が嫌で一座を組んでいたんです。古川さんが「わしではダメだから[教えきれないから]、ちょっと見てくれ」っていうことで升十郎さんに頼んだんです。升十郎さんの当時の奥さんは[市川]寿美八さんといって、人形振りが上手かった。だから、女形の人、『日高川』[『日高川入相花王』]とか『八百屋お七』[『伊達娘恋緋鹿子』]を習ったよ。私は、『矢口』[『神霊矢口渡』]で人形遣いやったり、頓兵衛やったりね。私が『沼津』で平作をやると、美寿次さんが頓兵衛をやった。

神山：ああ、おじいさんばかりになっちゃうから。

福升：うん、そういう時は役を替えるわけ。他にも、松王やったら、次も日本駄右衛門じゃ合わないから。師匠が「お前さんは、今度は南郷[力丸]だ」っていうから、私は「は

ーい」なんて言ってね。そのときは、私が南郷をやって、美寿次さんが日本駄右衛門をやった。

神山：美寿次さんが日本駄右衛門だと、弁天〔小僧〕は升代さんですか。それとも、梅香さんでしたか。

福升：弁天は梅香さん。赤星〔十三郎〕が升代さん。幹部が九人になってからはそういう人も入ってやるようになったの。

声の秘密

神山：失礼ですけど、声は最初からそういう太い声だったんですか。

福升：昔はかわいい声だったよ。升十郎さんが教えるようになって、『太功記』〔『絵本太功記』〕をやるときに、顔を見て、「お前さんは体格がいいから、〔武智〕光秀」って言われた。私は、まだ芝居がわからないから、「光秀ってなに？」って調子でした。升十郎師匠は台本が無いんですよ。役者を並べて、「はい、〔光秀の子〕十次郎ね。」って言ってから、セリフを言うの。私たちは、字がわからないから、平仮名で全部それを書くんです。光秀は、「ひつじょう」〔「必定、久吉このうちに忍びあるこそ究竟一」という十段目尼ヶ崎の段のセリフ〕なんてね。

館野：お師匠さんが口で言うのをみんなに書き取らせたんですね。

福升：うん。台本をくれるかとおもったら、台本は師匠のあたま〔の中〕なのよ。そのとき覚えたの〔演目〕は、東京へ行ってからちょっと直されたけどね。声はね、女の声だと駄目だから練習したんです。うちのすぐ近くに、豊川という川があるんですよ。川原は誰もいないから、ボートを漕いで行って、川に向かって、「ひつじょう」って練習したんです。大きい声で練習したら、声がかれちゃった。

神山：練習で声を太く変えたんですね。

福升：屋根のない祭り小屋に行ったら、昔はマイクがないでしょう。『熊谷陣屋』で弥陀六をやったときに、長台詞が聞こえないといけないから、必死に大きな声を出した覚えがあるんですよ。舞台以外は何もないところを粗筵で囲ってある。花道はちょっとあるけど、〔客席には〕屋根はなくて、上はスッポンポン。

館野：祭り小屋というのは、僕たちが「農村舞台」と呼んでいるものですね。たいていは神社にあって、舞台だけが常設の建物になっている。最近はマイクを使っちゃいますね。

福升：雨が降ると、学校の公会堂へ道具を運んでね。

館野：ここ〔白雲座〕みたいに立派な小屋だったら、天気に関係なくいつでもできるんですけどね。

福升：こんないい小屋があればいいけどね。

日比野：大劇場でマイクは使われましたか。

福升：マイクは一切なし。中座でも、南座でも、劇場はマイクなしだった。

日比野：劇場に設備はありましたよね。

福升：どうだったかねえ。どこかに隠れてあったかも知れないけど。目の前にマイクなんていうのはなかった。太夫さんも誰もマイクは使いませんでした。

神山：ボートで練習して、声をからして太くして。一か月くらいでそういう声になっちゃうものですか。

福升：そうね。「浪曲師みたいな声になったね」なんて言われたこともあるよ。それで、『勸進帳』で「ウン」って唸るところも無難にいった。でも、こんな声だから恥ずかしいの。

神山：健康に害がないんだから、いいじゃないですか。

福升：十六、七年前に声帯にポリープができちゃってね。下呂病院で器械を入れて、全身麻酔で取ったの。病気という病気はそれ一回だけ。もういい声は出ない。

館野：いやいや、立派ないい声ですよ。

福升：ぜんぜん駄目。女方は教えられんわ。

浜松座の頃

館野：東京に出るまえには、浜松を中心に東海地方の劇場に出ていたんですよ。

福升：浜松座で二ヶ月公演をやってたときに、市川宗家〔五代目市川三升。没後十代目市川團十郎を追贈（一八八〇 一九五六）〕が中座へ行く途中で降りて見てくれたんです。そうしたら、「うまいことはないけど、嫌さがない。素直にやっとな」ということで、市川の名前をもらったんです。

館野：浜松座で市川少女歌舞伎劇団の披露をしたときの筋書を持ってきました。一九五二年七月の後半から九月まで。のべ二ヶ月の公演でした。

福升：このときは正式な衣裳を着ないで、口上をやったんです。うちに「昭和二十七年七

月二十一日、市川宗家の門下とす」の書状があります。

館野：このときに、[以下全て市川]美寿次、福升、梅香、升代の藝名の披露もしたんですね。

福升：舞台に四人が並ばされて、赤毛氈にお扇子置いて、長いことお辞儀して。ひとりずつ名前言われるで、顔あげてお辞儀して。それを覚えてる。

館野：二ヶ月のロングランですから、ずいぶんたくさんの外題をやってます。

神山：『新口村』は孫右衛門でしょう。

福升：孫右衛門は、百回、二百回はやっとする。『引窓』もやりました。

神山：濡髪ですね。

福升：そう、肉[襦袢]を着せられてね。おばあさんを梅香さんがやって、与兵衛を美寿次さん、お早は升代さん。四人の幹部でなんでもやった。あとから、もう五人が名前をもらったんです。

神山：それで幹部が九人になったんですね。

福升：うん。これが九人になって、大谷[竹次郎]会長(一八七七 一九六九)のところに挨拶行ったときの写真。これは梅香さんでしょ、美寿次、寿々女、小牡丹、梅升、私、三福、升代、姫升。

神山：大谷会長は優しかったでしょう。

福升：やっぱり、女の子だし、子どもだったでね。宗家の市川三升というのはこの方です。隈取りにはうるさかったです。『車引』の松王や梅王をやると、隈があるんですよ。私が筆で[隈を]描いとったら、先生[三升]が「ちょっとこっちを向いてごらん」って。[化粧を]見せたら、「何だよ、そりゃ絵だよ」なんて叱られちゃって。化粧は取られちゃって、先生が描いたの。

神山：指で描くんでしょう。以前は指で隈を取ったと古い役者はよく言ってました。

福升：それで、私はいまだに指なんですよ。筆で描くとふるえちゃう。でも、いまはビデオとかテレビ[の時代]だで、[化粧も]綺麗でないと駄目だね。『野崎村』では、お光は田舎娘だから紅を使わない、お染はお嬢様だから紅を使う。そう習ったよ。私[の役]は久作だけど、ああいう老け役は手でチューチューってしわを描く。『沼津』の平作とか、『新口』の孫右衛門とかも同じ。

神山：しわを描くのは大変でしょう。

福升：うん。手だと太くなっちゃう。

歌舞伎十八番・『勸進帳』

福升：それから一年ぐらいたってから、上京したんです。向こうから来いって言われたのか、こっちから行ったのかはわからないのよ。大谷竹次郎会長のところへ連れて行かれました。田舎の女の子が来たんで、何か売り物になるようなものがないといかんということで、『勸進帳』の話が出たんです。こちらは、ちょっと『勸進帳』は大変だということで、[榎本虎彦の活歴]『安宅関』だったかな、あれにしてくれって言ったんです。会長は、「そんなものをやっちゃ駄目だ。まともな『勸進帳』をやりなさい」ということを仰ったんです。だから、会長さんのおかげで『勸進帳』ができたんです。

館野：『勸進帳』はどなたに習いましたか。

福升：みんなに習った。十一代目[十一代目市川團十郎(一九〇九 一九六五)]は舞台があるから全部を教えられない。松緑先生[二代目尾上松緑(一九一三 一九八九)]も教えてくれたね。

神山：雑誌のインタビューでは、升十郎さんが澤村長十郎[七代目澤村長十郎]という方に『勸進帳』を習ったと答えています。この長十郎という方は覚えてないですか。

福升：知っています。

神山：どんな感じの方でしたか。

福升：うーん、どんな方だったかな。みんな優しくかったです。子供の時だからよく覚えていません。海老蔵先生は、松竹の稽古場でお稽古しているときに、「鎧にそいし」のところで長唄を止めて、私に「君はどういうつもりで『鎧にそいし』をやっているんだ」って言うんです。まだ十八だからわからないでしょう。だから、「わかりません」って言ったんです。そうしたら、「鎧を背負うんだから、横は向かないんだ」と言って、ここを持ってこうするんだって、丁寧に教えてくれた。私は『勸進帳』で名前が売れたけど、先生がよかったからね。

神山：東京で弁慶をやるなんて大変なことですよ。

館野：歌舞伎十八番は『勸進帳』のほかに『鳴神』を手がけていますが、他にも候補はあったんでしょうか。

福升：『助六』をやるって、配役まで決めていたけど、ダメになっちゃった。

館野：あ、『助六』をやる話があったんですね。

神山：福升さんは意休でしょう。

福升：そう、意休。髭のじいさんだよって言われていた。美寿次さんと梅香さんも役が決まっていた。

舘野：美寿次さんの助六、福升さんの意休、梅香さんの揚巻のつもりだったんですかねえ。

文楽座・竹本三蝶一座の人びと

舘野：市川少女歌舞伎といえば、歌舞伎十八番が名物でしたけど、人形振り〔義太夫狂言のなかで、俳優が人形の動きをまねて演じる場面〕もよく出していましたね。

福升：『矢口』〔『神霊矢口渡』〕とか、『日高川』とかね。私は人形遣い〔の役〕で、『お七』なら櫓へ昇っていくときについて行ってね、だらり帯が邪魔にならないようにしたり、ツルツルって落ちるときにポンって合図したりした。唄も何も全部頭に入っていないとできないのよ。そうしたら文楽のいちばん偉い人がね。

神山：桐竹紋十郎さん〔二代目桐竹紋十郎（一九〇〇 一九七〇）〕ですね。

福升：そう。紋十郎さんが『日高川』の人形を貸してくれた。私が入形を持って、「ここへ手を入れなさい」なんて教えてくれて、それが新聞にも出たのよ。紋十郎さんが上手寄りにいて、私が下手でこう持ってた。

神山：紋十郎さんが左手を遣ってくれたんですか。それはありがたいですね。

福升：左手はやらないんですか。

神山：そりゃ、やらないですよ。そのころは主遣いだから、左手遣うなんて普通はないですよ。それは舞台でやったんですか。

福升：いえ、写真をとるためだけです。ちょうど『日高川』が出てたから、私も袴つけてね。そういう超一流の方がちょっとでも手をかけてくれたというのは、いまおもえば嬉しいことです。昔、豊橋に文楽が巡業に来たときに観にいったらね、「きみ、松王やってるんかい」って言われて、松王の人形を持って写真を撮ったこともある。松王みたいに裾に綿が入ったようなのは、なかなか外に出さないでしょう。

神山：そうですね。重かったでしょう。

福升：うん、重かった。これが文楽の人形か、すごいなあって思ってねえ。

日比野：『日高川』のときは、新聞記者の方がたまたま訪れていたんですかね。

福升：どういう風に頼んだのかはわからないんだけど、[文楽座の人が]人形を持ってきてくれた。梅香ちゃんの『日高川』で、私は人形遣いの袴つけて、かつらかぶって、人形を持ったの。写真はあります。

神山：そのときには、紋十郎さんのお弟子さんの紋寿さん[桐竹紋寿(一九三四)]も来ていたでしょう。

福升：一人ではなかった。誰かがついてきていました。

館野：文楽座の大夫さんと三味線さんが[少女歌舞伎に]出演されたこともありましたね。あと、文楽ではありませんが、女流義太夫の竹本三蝶(一八九六-一九七一)さんが出たこともありましたね。

福升：そうそう、三蝶さんで『三番叟』をやりました。全員女の方ばかりでしたよ。それは南座か、中座だね。

館野：筋書のコピーを持ってきました。四ツ橋の文楽座です。

福升：ああ、文楽座だったね。顔は忘れちゃったけど、ひとりだけちょっと若い方がいてね。

館野：あ、それは竹本駒之助(一九三五)さんですね。

日比野：素浄瑠璃でいまもやってらっしゃいます。

福升：私らより、若かったようにおもったけど。

館野：ちょうど同い年くらいじゃないでしょうか。

福升：なんだかわからないけど、「女の方の太夫で今度はやるんだよ」って言われたのよね。

館野：このときは、義太夫がセリフも全部言ってしまったんですか。

福升：うん、物言わんでやった。『新口村』だったかな。泣いたりはしたけど。

館野：このときは『釣女』をやっていますね。役割それぞれに太夫さんがひとりずつ付いています。

福升：『釣女』もやってるんだね。私[の役]は醜女ね。うん、うん、女の太夫さんでやった。覚えてるわ。

尾上松緑・藤間藤子に踊りを習う

館野：東京に出てからは舞踊もずいぶん出されていますね。

福升：『棒しばり』とか、『身替座禅』とか、大きいものは松緑さんに習いました。松緑さんは踊りの名前は藤間勘右衛門さんだね。あと、お父さまのお弟子さんの藤間藤子（一九〇七 一九九八）さんね。

神山：藤子さんは七代目の幸四郎さんのお弟子さんですね。

福升：柳橋へ行って習いました。踊りは、『釣女』がいちばん最初でね。それから、『三人三番叟』、『乗合船』、『三人片輪』、『小鍛冶』、『近江のお兼』。女の子は『道成寺』、『藤娘』。私らは『連獅子』もやった。『乗合船』は、私と美寿次さんが萬歳と才蔵。恥ずかしいけど、鼓でひとつ歌をうたって。みんな船へ乗って、決まって終わるっていう踊りだった。ほとんど藤子先生のところで習いました。歌舞伎のないときは、紀尾井町の家元〔二代目尾上松緑〕のところへ行って、『棒しばり』とか『身替座禅』とか大きいものを習った。

神山：弁慶橋のね。

福升：そうそうそう。辰之助さん〔初代尾上辰之助（一九四六 一九八七）〕が病気で亡くなられたもんで、いまは変わりましたがね。親とおじいちゃんが亡くなって、〔藤間〕あらしさん〔四代目尾上松緑（一九七五）〕は藤子先生のところであずかってもらったね。松緑さんが岐阜に巡業に来たとき〔一九八二年九月公文協西コース〕に、『弁慶上使』が出たもんで、私、会いに行ったんですよ。そうしたら、先生〔二代目松緑〕が丹波行李の上に布団敷いて寝てる。「先生、どうしたの」なんて聞いたら、「あのな、膝に水が溜まって」って。

神山：足が悪かったからね。

福升：「久しぶりに見せてもらって、きょうの弁慶素敵だった」なんて話してね。「息子〔辰之助〕はどうしたの？」って聞いたら、『道成寺』に出てるって。

神山：押し戻しですね。

福升：うん。もう花道に行っとるって言ったんで、それじゃあ、「よろしくね」って言って出てきたんだ。

神山：福升さんは『茨木』で渡辺綱をやったでしょう。そのときに、梅朝さん〔四代目尾上梅朝（一八九二 一九六五）〕という人も来ていましたか。

福升：梅朝さん。うーん、どうだったかね。『茨木』は、最後に口を開けるところを、松緑先生にだいぶ直された。上げすぎてダメ、下げてもダメ。難しいですよ。

神山：あれは苦しいでしょう。

福升：そう。装束を脱いで、長袴で毛を振る。それにあわせて[後ろに]下がる。かつらの白髪がだんだん落ちていく。美寿次さんも結構しごかれとったよ。『茨木』は大物だもんねえ。

神山：綱はずっとじっとしている時間が長いから、辛いでしょ。

福升：『茨木』もよく出ていました。もう、何回やったか知らん。

成田屋の人びと

舘野：これはお稽古の写真ですね。

福升：十一代目[團十郎]が教えてくれているところね。こちらが翠扇さん[三代目市川翠扇(一九一三 一九七八)]のお父さんの新之助先生[五代目市川新之助(一八八五 一九五六)]。

神山：あ、ここにいるのは福之助さん[三代目市川福之助(一九〇四 一九九〇)]ですね。

福升：よくわかったね。おばあさん役が得意だった。

神山：前に国立劇場で歌舞伎の制作をやったんですよ。僕が入った頃は、福之助さんがまだお元気で、仕事でいろいろお願いしました。

福升：福之助先生は年寄りの役で、『引窓』はおばあさん、[『忠臣蔵』の]六段目はおかや。「[福之助の]何々の役を見ろ」って言われました。

神山：そうですか。よく知ってましたからね。いい写真ですね。

舘野：お弟子さんも含めて、成田屋のみんなが先生だったんですね。

神山：これは海老さまのお宅ですか。

福升：これはお稽古場だけど、お宅でお稽古したこともある。海老蔵さんが、明治座の『寺子屋』[一九五三年五月明治座]を客席で見て、首実検がダメやと。「若君菅秀才の首に相違無し。相違ござらぬ、玄蕃殿。でかした源蔵よく打った」のところで「目が死んどる」って。そんなのわからないもんね。「お稽古が済んだら家に来なさい」って言われて、事務所の前にタクシーが止まっとるの。お宅に着いたら、奥さまが「まあ、あがりなさい」って優しくてね。二階へ上がったら、先生がデンとおって、向かい合いだからドキドキしちゃってね。

神山：当時の海老蔵さんは大変な人気でしたからね。

福升：ねえ。舞台へ出れば、「海老さま、海老さま」って。〔セリフは〕もう立て板に水を流すという感じで。

神山：名調子でね。奥さまというのは千代さんですね。

福升：そう。絶対に人前に出て来なかったね。私がお稽古へ上がったときには、お茶とお菓子をくれたよ。

館野：成田屋の方々の他にも、錚々たる方々に習われていますよね。

福升：関西へ行くと、鴈治郎さん〔二代目中村鴈治郎（一九〇二—一九八三）〕に教えてもらった。いまの藤十郎さん〔四代目坂田藤十郎（一九三一—）〕のお父さんね。私たちが行っとるころは、藤十郎さんは扇雀といって、鶴之助〔五代目中村富十郎（一九二九—二〇一一）〕と扇雀で関西歌舞伎の若手でよかったのよね。あと、寿海先生〔三代目市川寿海（一八八六—一九七一）〕。雷蔵さん〔八代目市川雷蔵（一九三一—一九六九）〕には教えてはもらわないけど、若旦那って呼んでた。

神山：〔稽古に雷蔵も〕いましたか。

福升：見えていません。寿海先生には『修禅寺物語』を習った。

神山：福升さんは夜叉王をやったんですね。

福升：ひげをつけてね。「黙っている」って言われたんで、スーッと緞帳があがったら、虫の声だけで、五分ぐらいこうやとる。よくあの間おったなっておもう。寿海先生がお稽古に立ち会って、何回も細かく教えていただいてね。宗家〔三升〕がそうお願いして下さったからだと思いますが、関西でもよくしてもらった。

好きな演目・嫌いな演目

日比野：〔この前日に聞き書きをした市川〕梅香さんは義太夫物が好きだったとおっしゃってましたが、福升さんはいかがでしょう。

福升：そうですね。デンデン物ばかりなもの。『修禅寺物語』は、寿海先生が関西で変わったものをひとつやろうということではじめただけで、大体は時代物が多かったです。

日比野：福升師匠もやっぱり義太夫物のほうがいいですか。

福升：そうですね。世話だと、『新口』、『野崎』、『酒屋』、『引窓』、そんな感じですね。子どもだったから、デンデンで助けてもらわないと。

神山：さっき弥陀六の話がありましたけど、『熊谷陣屋』では、熊谷もされてますよね。

福升：ええ、熊谷は長いことやっています。

神山：〔盛綱陣屋〕の盛綱はどうですか。

福升：そんないい役はやってない。

神山：あれは美寿次さんですか。

福升：美寿次さんが盛綱で、私が和田兵衛だった。盛綱なんてニンじゃないから、どんなになったってやらせてもらえない。

神山：松王とか、熊谷とか、ああいう役はやってて気持ちのいいものですか。

福升：そうですね。いちばんいいね。光秀が一番嫌い。

神山：『太十』の光秀ですね。

福升：うん。だって、ものすごく重い本物の鎧でしょう。初菊が兜を持っていくときに、松竹の人が「もう着ましようか」って言って、「はい」と鎧つけてもらい出を待つ。『松下（まつしも）』の着物でもそうです。『松下』は、このまえ、ちょっとやったわねえ。

神山：『松下』というのは、『松王下屋敷』ですね。めずらしいですね。

福升：はい、むすめ歌舞伎が『鳴神』をやって、私たちが二十年ぶりに『松下』をやった〔一九九一年一月名古屋市民会館〕。そのときは、日にちがないから、吉右衛門〔二代目中村吉右衛門（一九四四）〕さんの衣裳でお願いしますって言ったんだ。

神山：吉右衛門さんは大きいから、寸法が合わないでしょう。

福升：うん。仕立て直してはあるけれど、羽織が着れんよ。腰掛けて待っていて、もうじき出るという時に羽織を着せてもらった。あの衣裳も重かったねえ。

日比野：着付けのお手伝いをしてくれる人は、松竹から来てましたか。

福升：衣裳は松竹が全部持ってくるんですよ。衣裳を着せる人は、前に一人、後ろに一人、それから渡す人の三人。團十郎さんのお弟子さんたちが、舞台が済むと飛んできてねえ。弁慶なんかは、「着せてあげるからいいよ」なんて、全部着せてくれた。

館野：そういうことも成田屋の方が助けてくれたんですね。

福升：そうそう。お弟子さんだからね。自分の師匠も着せてるから、わかってるんだね。弁慶で花道が入ってくる时候にも、二人がかりでバーンっと止めてくれたりね。『由比ヶ浜』〔『三国一曾我礎』〕で馬に乗ったときには、師匠に「おい、福さん。飼葉料（かいばりょう）出してよ。」なんて言われて。飼葉料なんてわからんから、聞いたら、中日に〔馬を演じる役者に〕祝儀を出すんだって。そうしたら、「そんなもんいらん」って言わ

れたから、食堂の牛丼券というのを十枚ずつあげたりした。すごくて、よくしてくれた。その人たちも早く亡くなって、かわいそうだった。

楽屋の生活

福升：小林利枝というのが私の妹なんです。成田屋の若い衆が明治座の砂場へ連れて行って、トンボ返りを教えたんです。タオルを持って、ポーン、ポーンってね。

神山：利枝さんがトンボ返ったんですか。

福升：うん。十三くらいだったかな。練習して五人ほどかえったよ。でも、最後の頃には音をあげてみんな辞めちゃって、うちの妹がいちばん最後までやった。『義賢』で二人一緒に鎧櫃から飛び出て、義賢が後ろに抱き着いてね、高二重から落ちる。

神山：「返り落ち」ってやつですよ。

福升：そう、それをやった。あとは映画 [市川少女歌舞伎一座が出演した『ひばりの三役 競艶雪之丞変化』前後編（一九五七）] の劇中劇] でひばりさんの横の手代をやってた。いい役だと、『対面』 [『寿曾我对面』] の近江・八幡とかをやった。私が北海道行く、九州行くっていうと、「お姉さんいいな、私も行く」って羨ましがって、十三で [劇団に] 入ってきた。宗家とちょっとした面接があって、「はい、よろしい」ということで入ったの。主役はできなかったけど、トンボを売りにしてね。

館野：雑誌にトンボの稽古してる写真が載ってるのを見てびっくりしましたよ。

神山：大劇場に出ているころの泊まりは旅館でしたか。

福升：ほとんど楽屋だった。御園座でもどこでもね。私は鏡台の前で一人で寝たよ。東京の渋谷のときは通った。

神山：東横ホールですね。

福升：あそこは泊まれんから、道玄坂を登って旅館に行った。

神山：三越劇場も泊まれないでしょう。

福升：三越も浜町の旅館に泊まった。升十郎師匠がうるさいんですよ。みんなで行列して、小屋へ行って、 [公演が] 済むとまた並んで旅館へ帰った。みんなは近くへ遊びに行ったけど、私は『勸進帳』の弁慶を練習してた。『釣女』とか、『三番叟』とか、十八のときに習ったのは、音が鳴ればスッと踊れる。三十になってから習ったのは、ひと月たったから何にも覚えてないね。旅館に『妹背山』の鱧七の写真を撮りに来たこともあったよ。長

袴でとっくりをぶら下げたところと、それを脱いで手ぬぐいを取ったところの写真を撮った。

神山：それはブロマイド用だったんですか。それとも、雑誌の取材か何かだったんですかね。

福升：四天になった写真はブロマイドで売ってたねえ。

館野：ぶっかえって、鱧七から金輪五郎になった後ですね。

神山：ブロマイドはご自分では持ってないんですか。

福升：持ってる。『盛綱陣屋』では、和田兵衛と暴れの注進と二枚ずつくらいあります。

神山：ファン向けのブロマイドはあったんですね。ファンレターもたくさんもらったでしょう。返事は出したんですか

福升：うーん、あんまり出さなかった。

館野：あはは、そうですか。

福升：年賀状は二百枚くらい出しとった。事務所からだけだね。

館野：ファンにはいろんな方がいらっしゃったでしょう。

福升：常磐津の一巴太夫さん [常磐津一巴太夫 (一九三〇 二〇一四)] の奥さんが私のファンで、追っかけやとったの。

神山：一巴太夫さんはこのあいだ亡くなっちゃいましたね。

福升：去年の八月十五日。二階から降りてこんで、お弟子さんが見に行ったら、亡くなっとったってね。『歌舞伎一期一会』 [二〇〇九、NTT出版] という本に私のことを書いたからって、送ってきたのよ。自分では印刷屋の小僧だったなんて言うもったわ。

神山：そうそう、あの人は途中から本職になったんですよ。

福升：その一巴さんの奥さんになる女の子はお母さんと二人暮らしでね。私もその子の家に泊まりに行ったり、その子が私の家に来てうちの母親たちと遊んだりしてた。すりこぎと山芋を背負って来て、「弁慶に精をつけようって」って芋をすってくれてね。

神山：それは大変なファンですね。

福升：その子が、置屋のおかみさんに誘われて、一巴さんの常磐津の会に行ったんです。おかみさんに着いて楽屋へ行って、出番が済んだら、浴衣を着せてあげて、お茶を出す。一巴さんが「こんなに間に合う子はいない」ってすっかり惚れ込んだじゃってね。私に「なんとか仲を取り持ってくれ」って頼んだんです。私は、「取り持つもないわ、自分で考えて、口説きな」なんて言ったの。 [訃報が] 新聞に出てびっくりした。でも、幸せ [な人

生]だったわね。

日比野：東京と大阪でお客さんが違うなって思われたことはありますか。

神山：声なんかは掛かりましたか。

福升：声が掛かるのは東京が多いですよ。そういう[大向こうの]会があるからね。朝に[楽屋の]暖簾を開けて、「おはようございます、おめでとうございます。」って挨拶に来るから、師匠が祝儀を出すと、「成田屋！」とか、「福成田！」って、出の間のいいところで掛けてくれる。関西はそんなにバー、バーって大きい声でいうのはあまりなかった。

神山：お客さんが楽屋に来ることもありましたか。

福升：ありましたね。

家族の話

日比野：ご両親やご家族は、福升師匠が少女歌舞伎に参加することをどんな風にお考えになっていたんでしょうか。

福升：踊りはさせてくれたんだけど、歌舞伎は母親が反対した。母親は田舎の堅い家から嫁に来たので、「女の子が歌舞伎をするなんてとんでもない」って。でも、父親とおばあちゃんは[芝居が]好きなのよ。父親も祭りのときには役者をやっていたんですよ。『対面』の朝比奈で出たときに、一杯飲んでから出たんで寝ちゃった。

一同：わはは。

福升：[客席で]「お父さん、寝ちゃっとるよ」なんて言ってたら、後ろからつついてくれてね。メチャクチャだったね。

館野：そうしたら、お芝居はお父さんゆずりですね。

福升：おばあちゃんもおじさんも好きだしね。父親の芝居の幕間に、私は踊りで出ていました。他の役者の子どもたちと一緒にね。母親も、みんながあんまり言うもので、しぶしぶ認めてくれた。

日比野：梅香師匠はお母さんが巡業についていったと聞きましたけど、福升師匠の家族の方が巡業についていったことはありますか。

福升：いいえ、私ひとりで誰も行かなかった。梅香ちゃんと美寿次さんのお母さんは、子どもたちの世話をするために歩いてたんです。衣裳屋はちゃんと来るけど、衣裳方

の手伝いをしたりね。うちは商売やってるから出られない。

日比野：ご商売は何をされておりましたか。

福升：貸しボート。鮎がとれると、それを七輪で焼いて食べさせて、島を一周してくる。ボートは十艘くらいあって、雨が降ると「水をかき出せ」って言われるから、学校に行く前に水をかいたよ。おばあちゃんは公園で豆自動車を貸してた。運転は私やら、弟やら、兄がってたの。乗る人が、いきなりアクセルを踏んだもんで、足がタイヤのところに入って、[足の]指が曲がっちゃったんです。おばあちゃんは「こんなの治る、治る」って言って、医者連れて行ってもらえなくてね。曲がったまま、固まっちゃったんですよ。おじさんは玉突きの仕事してた。みんながバラバラに仕事に出かけるから、私が芝居に行っても何も言わなかった。

日比野：それではさびしかったんじゃないですか。巡業中はご家族には全然会えなかったわけですから。

福升：ううん、そんなことなかった。自分の兄弟よりも長く、三百六十五日ずっと一緒に朝昼晩すごしたからね。時には喧嘩もしたけどね。学校へ行けないから、学校の先生も来てたよ。それぞれがお風呂に入ってから勉強してた。

日比野：他の座員の方々も、お家をご商売されてた方が多かったですか。

福升：そうだねえ。あんまり家庭のことはわからないけどね。美寿次さんのところは旅館やとった。

日比野：梅香師匠の家も料理屋さんをやってたって。

福升：うん、そうかもわからん。梅升さんのお母さんは一杯屋っていうの、夕方からやるようなお店をやってた。梅升さんも芝居のないときはお手伝いしとったよ。

日比野：[豊川は] 門前町だから水商売の方が多かったですか。

福升：普通の固い会社勤めの方が多かったですよ。

日比野：特にそういう商売じゃなくても、藝事が好きな土地柄だったんですね。

福升：そうそう。だから、おばあちゃんも好きだった。それから、藤間勘寿朗さんね。勘寿朗さんは、私のうちにおったのよ。

神山：え。豊川にいたんですか。

福升：うん。どういう理由か知らないけど、戦争中に疎開で来てたみたい。父親も、おばあちゃんも、「古井さん、古井さん」って呼んでた。本名が古井リュウヤ[漢字不明]っていうのよ。私が中座へ行ったときに、お客さんが来ているからって出ていったら、古井

さんだったの。家に電話して、「お父さん、古井さんが藤間なんとかって言って来たよ」って言ったの。[豊川の]家にいたころは、おじさんと一緒に寝起きしてた。お風呂を沸かしてあげると、私に「淑子[福升の本名]ちゃん、もうちょっとお三味線もやりなよ」なんて言ったりしてね。

日比野：そのころは踊りのお師匠さんだったんですか。

福升：戦争中は豊川に海軍工廠というところがあって、空襲で全滅だったのよ。私の所にいる時は勘寿朗さんは何もしていません。うちの父親とおばあちゃんとは、どういう関係だったのかな。

日比野：疎開じゃなくて下宿という感じだったんですかね。

福升：うん、そうだね。縁側で三味線を弾いててね、お芋のふかしたのを持って行って、私が皮むいて食べると、「皮なんかむいて勿体ないですよ」なんて言ってたよ。踊りの名前はあって、戦時中もどこかではやっていたみたい。私にも、踊りをやらないかって言ってたけど、習ってはいない。その古井さんが大阪へ行って、藤間勘寿朗とって、宝塚の生徒を教えて有名になってたの。後を継いだ藤間良輔という人が年賀状をくれたりしたよ。

日比野：ところで、福升師匠はお給金を直接自分でもらっていましたか。

福升：浜松座がやってる時は、「はい、ご苦労さん」ってもらうから、うちへ送っちゃうのよね。

日比野：梅香師匠に伺ったら、お母さんがお取りになっていたからわからないとおっしゃっていたので。福升師匠は自分でおいくらだってことはわかっていましたか。

福升：うーん、どういうふうにしたかな。あはは。

館野：自分でお給金をもらったら、それをそっくり家に送ってたんですか。

福升：うん。そんなに持っとれんもんね。巡業だと、一日百円とか、二百五十円とかもらって、「はい、さようなら」だった。それは海で、船の上でやってたころね。

館野：船の上というのは、三越劇場に出るまえ、一九五一年に京都の伊根の祭に出たときの話ですね。

福升：そのときは、普通の家庭に泊まったから、「どこどこのご馳走はよかった」なんて話をしてねえ。

日比野：幹部四人は同じぐらいの給金でしたか。それとも役によって差がありましたか。

福升：いやいや、全部いっしょ。子どものときから一緒です。

演目いろいろ

神山：これは、祖母が観にいったときのだと思うんですけど、『市川少女歌舞伎写真グラフ』という冊子です。筋書は残りますが、こういうものはなかなかないですね。この弁慶はかたちいいですよ。

福升：そんなことない。叱られて、叱られてね。ずいぶん古いね、御園座のS席が三六〇円だって。

神山：当時は一等席がそのくらいでしたね。裏も御覧ください。

福升：ああ、ここにおるわ。『鈴ヶ森』に出てくれっていわれて、顔汚して出た覚えがある。

神山：これは昭和三十年（一九五五）ごろ。東京で『すし屋』と『勸進帳』をなさったときですね〔一九五五年八月明治座〕。これが紀尾井町〔二代目松緑〕にダメだしされたっていう『茨木』の綱ですよ。昼四つ、夜四つのおずっぱりだから、大変だったでしょう。

福升：あのころは全部出たよ。美寿さんと二人で、『どんどろ』の明珍、妙林もやった。私は『勸進帳』もやっとするし、『伊勢音頭』の喜助もやったから、一幕も休みがなかった。

神山：本当に食事する時間もないですね。

福升：ええ、本当に。でも、セリフがえらいから全部終わるまでは絶対食べないの。

神山：これは『鳴神』ですね。

福升：これは美寿さんと升代さんでやったときだね。私と梅香ちゃんでもやった。

館野：少女歌舞伎では珍しいものもずいぶんやっていますね。

神山：岡本綺堂の『酒の始』〔一九六〇年三月新宿第一劇場〕。これは難しいでしょう。

福升：中国風で義太夫も入っとりゃせんし。

神山：これは珍しいですよ。僕も見ることがない。

福升：先生はだれだっけ。

神山：巖谷楨一（一九〇〇 一九七五）って書いてあります。巖谷さんって覚えてますか。

福升：うーん。岡本綺堂といたら『修禅寺』の人だね。『修禅寺』は寿海先生に習ったんで覚えとるけど、これはどうだったかな。

神山：『髭櫓』[一九六〇年六月御園座]というのも珍しいですね。

館野：自慢のヒゲを奥方に剃られそうになるので、髻をつくって守るというお話らしいのですが。

福升：私は奥方やっとするね。自分で感心しとっちゃいかんね。

館野：ところで、『太功記』とか、『熊谷陣屋』とかは、地芝居なんかだとよくやりますけど、少女歌舞伎ではそういうものはあんまりやっていないですよ。特に大劇場ではほとんどやってないです。

福升：そうだね。私らはわからんけど、例えば、ひばりさんの先生の花柳啓之さんの振付で『鶯宿梅』というのをやるとか、[いろいろな人に]うちのもひとつやってくれと頼まれたのかも。

神山：やっぱり興行物だから、仕込みもあるんだろうね。

福升：今ならわかるけど、そのころは決まれば、その外題をやるというだけ。先生に違った人が来れば、「お願いします」って言うだけだったね。

映画『ひばりの三役 競艶雪之丞変化』について

福升：さっきの『鶯宿梅』というのは、ひばりさん[美空ひばり(一九三七 一九八九)]の先生で花柳啓之(一九一四 一九七五)さんに習った。いまは糸之[花柳糸之]さんっていう人があとを継いで、歌手の裏でよく踊ってるね。『鶯宿梅』は、私はカラス[の役]だった。御園座でやったのを覚えてる[一九五九年八月御園座]。啓之さんも亡くなっちゃたってねえ。

神山：亡くなりましたね。あのころは、美空さんでも、三波春夫(一九二三 二〇〇一)でも、誰でも歌手なんかがやる踊りは全部花柳啓之さんでした。ひばりさんといえば、映画の『雪之丞変化』ですね。

福升：『雪之丞変化』は日活に通ってね。

神山：撮影所はどこでしたか。東京ですか。

福升：東京の日活の撮影所だった。私たちは部屋を一部屋もらって。渡辺邦男(一八九九 一九八一)監督が毎朝、「ごくろうさま！」って覗いてくれると、こっちも恐縮して「おねがいします！」なんてね。私は日本駄右衛門をやった。

神山：見ましたよ。最初の[劇中劇の]『浜松屋』のね。

福升：ひばりさんが弁天だから、南郷とか、駄右衛門とか相手の役は少女歌舞伎がやった。[『将門』の]滝夜叉姫はひばりさんで、美寿次さんが光圀。お軽勘平は、勘平を美寿次さんで、ひばりさんがお軽だったね。そうして舞台上で踊ってたら、血だらけの人が上手から出て来て、客席に倒れたんよ。前もって聞いてなかったの。来るって聞いてれば、意識しながらやれたのに。

一同：わはは。

神山：それはリアルでしたね。

福升：そう。血だらけだから、キヤーって逃げたの。顔がびっくりしてる。そうしたら、渡辺監督が、「よかったから、それで行きます」なんて。この映画はどういうつながりで行ったかはわからないんですよ。

館野：浜松座の小野さん[小野近義(一九〇五 一九八一)]の自伝[小野近義『水辺談話』一九七八、白川書院]を読みますと、小野さんは興行の関係で昔からひばりさんと付き合いがあったそうですよ。

福升：あー、よう歌で来たでね。うちの近くの豊川の映画館にも来たの。自分の歌がまだなかったもんで、笠置シヅ子(一九一四 一九八五)さんのブギウギを歌ってた。のど自慢に出て優勝したって司会者が言った。年はほとんど一緒だもんね。私らも歌舞伎をやったもんで観にいったんだね。小野さんの付き合いということは初めて聞いたんですよ。今なら聞けるけど、十七や十八の頃は、「今度、ひばりさんの先生に習うんだよ」って言われても、「何で？」なんて聞けなかった。

神山：そのひばりさんの先生というのが花柳啓之さんですね。『雪之丞変化』の振付は全部啓之さんでしたか。

福升：劇中劇だけだけどね。

神山：渡辺邦男監督は早撮りで有名だったんですよ。三日とか一週間くらいでつくっちゃう。やっぱり撮影は早かったですか。

福升：早かった。私たちは一週間くらいしか行かなかった。もちろん、芝居だけだからね。パッパッパッと撮って、最後に全員で舞台上で写真撮ったりしてね。美寿次さんと朝の七時、八時から羽二重やって、化粧して、かつらのせて待ってた。「お願いします」って言われたら、すぐ行かなくてはならんもんで、ずっと[役の扮装を]取れない。声が掛かったのが夕方の五時ごろ。私なんかね、頭巾取ってしまって、袴と羽織も脱いで寝ててね。みんなに「福ちゃんだけ楽だね」って言われたよ。うちの妹は番頭だったから、かつらが

取れんのだよ。取ると、「すぐ来い」なんて言われるから。でも、みんな優しく、「いま、お嬢 [美空ひばりの愛称] が着替えてますんで、もうしばらく待ってください」なんて言ってくれたよ。

義太夫語りの人びと

神山：義太夫で栃木訛りの文春太夫さん [竹本文春太夫 (一九〇四 一九九一)] という方がいらっしやっただでしょう。

福升：文春さんは長かったですよ。壽太夫さん [豊竹壽太夫 (一九〇四 一九七六)] と文春太夫さんと一緒に巡業したときに、壽さんが文春さんに「あそこはこういう風にいったほうがいい」って注意したりしてた。 [後になって] 壽太夫さんが東京の国立劇場に行って、文春さんを連れてくって言ったのだよ。

神山：文春さんは壽さんの紹介で大歌舞伎に戻ったんだ。それは初めて聞きました。

福升：文春さんは、もともと今枝さん [藝名は鶴澤友枝] っていうここ [白雲座] で三味線弾いている人の身内やで。 [今枝さんの] おばさんにあたるのが澤村茂美次っていう女の役者で、その一座は衣裳も鬘も全部持ってた。 [今枝さんの] お父さんが興行師だから、文楽にいた [鶴澤] 友太郎 [一九七五年 [昭和五十] ごろの長浜曳山歌舞伎に出演しており、『歌舞伎音楽演奏家名鑑』にある初代中村鴈治郎付の鶴澤友太郎とは別人物] さんを連れてきて、今枝ちゃんを仕込んだのだよ。今枝ちゃんは、女だけどバチを持てばすごい叩く。去年から [白雲座には] 来てないけれど、それまでは来てた。足が悪いから、二人で抱えて床に乗せるけど、三味線は今でもちゃんとしてる。

神山：文春太夫さんは、最後は歌右衛門付きの竹本になっちゃった。すごく偉くなったんですよ。

福升：テレビで芝居を見ると、よく出てたでねえ。亡くなったときに、なんだか立派な葬式してもらったって喜んでたわ。私達の巡業にはいつも一緒に、一緒に撮った写真もあるよ。

神山：壽太夫さんは、関西で二代目の延若さん [二代目實川延若 (一八七七 一九五一)] に付いてて、戦後は二代目鴈治郎さんともやってたから、その関係でいらしたのかな。壽さんが少女歌舞伎にいたのは知らなかった。あの人は世話物が得意でしたね。

福升：そうそう。だから、関西物は壽さんに習った...習った、というほどではなくて、セ

リフをところどころ教わっただけですけど。

館野：筋書を見ますと、豊竹八千代という方が出ていますね。

福升：この人がまたよかったですよ。見台を持って、「ひれふる山」なんてねえ。もうゾゾツとするくらい。

館野：この方は女性ですよ。年はどれくらいでしたか。

福升：[少女歌舞伎に]出てたころは、もう五十くらいだったかな。旦那さんが道具を手伝ってね。この八千代という人は本当にすごかったですよ。『朝顔』[『生写朝顔話』]なんかもね。

神山：大井川の渡しのところね。

福升：うん。見台を持ってね、「カアア」って。あれは頭にある。本当によかったねえ。もう亡くなったかなあ。

日比野：どういう経緯で少女歌舞伎に来られたんですかねえ。

福升：そういうのはわかんないんだけどね。よく巡業に行ったよ。あと、竹本朝輝っていう人がお姉ちゃん[豊澤島栄]と二人で来た。あの子も小屋に行ったら、太夫元が「姉妹で外国行ってきた子どもがいるよ」って言うの。『どんどろ』[『傾城阿波の鳴門 どんどろ大師』]を外国でやって帰ってきたって言っていた。[劇団に]着いてくることになったんだけど、[浄瑠璃が]本行で歌舞伎じゃないの。セリフも全部言っちゃうから、友太郎さんが歌舞伎の浄瑠璃に直してね。その人[朝輝]の旦那さんが杵屋藤之輔さん。一緒にやっとうちに仲良くなってね。この人[藤之輔]も地方巡業が好きで、「門和佐[白雲座の所在地]は紅葉がきれいだ」って言って、楽しんじゃあ、来とったんですよ。朝輝さんは、[その後]東京の女流義太夫の会に入って朝輝っていう名前をもらったんだね。

館野：他にも、覚えている方っていらっしゃいますか。

福升：うちで笛を吹いてた望月太喜二郎(一九三五)さんが同い年だった。この人のお父さん[松島庄蔵]が立唄で劇団におってね。「うちの息子がいま大学に行ってるから、来たら頼むね」って言って、うちの劇団に来たの。長いこと居たよ。大きい場所も出たし、北海道に巡業に行くっていえば、それにもついていった。[太喜二郎が]出世して東京に戻ってからもずっと付き合ってた。[十二代目市川]團十郎さんと外国へ行ったとか、[十八代目中村]勘三郎さんとどこへ行ったとか葉書をくれるんですよ。パタッと来なくなったで、もう亡くなったのかな。私と同い年で八十過ぎとるからね。

市川女優座歌舞伎劇シリーズ

日比野：文春太夫さんも出ている市川女優座歌舞伎劇シリーズという映画がありますね。実は、きのう豊川で見たんですよ。

福升：あれはね、升十郎さんの実家のある平尾の公民館を完全に舞台にして、御莊金吾（一九〇八—一九八五）という方が三十分ドラマにしたの。『鏡山』とか、五つくらい作った。『玄治店』は蝙蝠安をやったで、覚えとる。

館野：豊川にあったのは、『[傾城]阿波の鳴門』、『新口村』、『鏡山[旧錦絵]』、『壺坂[靈驗記]』の四つです。

日比野：フィルムをビデオテープに直したものが残っているんです。本当は『玄治店』もあったんですね。

館野：台本が残っていて、『玄治店』もあったとおもいます。

福升：『京人形』もあるでしょう。

神山：福升さんは左甚五郎でしょう。

福升：そう、左甚五郎をやった。カメラがあって何だか仰々しかった。御莊先生に「家に遊びにおいで」って言われたから、行ったのよ。隣が山本富士子（一九三一—）さんの物凄い家だった。先生の家には、外国の怪獣の剥製みたいなのがいっぱい置いてあった。

日比野：福升師匠は映画はご覧になりましたか。

福升：見てない。

神山：梅香さんも全部は見てないって言ってたね。

福升：外国へ持って行ったって言ってたよ。撮ったときの写真があるんで、撮ったことはわかる。甚五郎と蝙蝠安と岩藤の写真がある。

神山：撮影は公民館でなさったんでしょう。

福升：公民館が丸っきりあいてたからね。十日だったかな。

神山：十日で五本撮ったんですね。

日比野：この映画は御莊金吾さんが持ち込んだ企画だったんですか。

福升：そうそう。

日比野：それまで、御莊さんはまったくお付き合いはなかったんですか。

福升：そうですね。御莊さんが話を持ってきて、師匠が公民館なら開いとるということで

、そこで撮ったの。みんな家から近いから通ったわね。

日比野：いまや市川少女歌舞伎を観られる唯一の作品なので本当に貴重ですよ。

福升：『雪之丞』以外ではね。

神山：声は後から入れましたか。

福升：その場で喋ったよ。後でどういうふうにしたか知らないけど。

日比野：『壺坂』は確実に音と口がずれていたの、アフレコをしたのではないかとおもいます。

神山：『京人形』は、そんなにセリフもないからアフレコをしなかつたらうね。道具が立派で、あれが公民館とは思えませんよ。

日比野：公民館に道具を全部運び込んだんですよ。

細江：升十郎が松竹からお古を持って来たんじゃないか。松竹が間違えて、『勸進帳』の衣裳を升十郎のところに送ってきたことがある。

福升：あはは。

日比野：間違えたのかどうかわかりませんね。

細江：うん。わからんね。升十郎はそう言ってたよ。あれ[升十郎]は狡い男だなあ。なんでも自分のものにしてしまう。

館野：そういうところもあったからこそ、少女歌舞伎を大きくできたのかもしれないね。
。

女優座に改称してから

館野：これが女優座になったあとの筋書[一九六二年九月読売ホール]のコピーです。福之助さんが国立劇場の図書館に寄贈されたものです。

神山：本当だ。水鳥さんって、福之助さんの本名ですよ。

福升：女優座になったときは、ちょっと揉めたんだな。宗家のところへ謝りに行ったけど、玄関から入れてもらえなかった。

神山：三升さんが亡くなった後でしょう。

福升：ええ、十一代目[團十郎の代]になってから。いろいろ松竹の人も入ったりしてね。私らは何にも無いんだけど、挨拶に行ったら、玄関で入れてもらえなかった。前もって説明しなかったから、それがいけなかったんだよね。いい年して、いつまでも「少女」と

いうのはどうかということで、「女優座」にしたの。浜松座が手を引いてからは、大場所 [大劇場] も止めてしまって、それでも、みんながやりたいというのでやったけど、お客が入らんときはお金がなくてね。おんぼろ小屋で待っている間に、師匠が金を工面してくれてくれた。そんな恥ずかしいこともあったよ。それまでは浜松座の小野さんがよくても悪くてもちゃんとやってくれていたのよね。あと、みんな結婚すると言って止めていったのよね。

神山：美寿次さんでしたっけ。

福升：いや、それは升代さん。升代さんが最初にポンとやめたんです。それで升十郎さんの奥さんだった [市川] 寿美八という人がその穴に入ったんです。

細江：それから升十郎さんはうちに来たんだね。昭和五十三年（一九七八）からだから。その前の年に下呂の観光会館で少女歌舞伎の公演があって、升十郎さんに「ここに小屋があるから、教えに来てくれんか」って頼んだんだ。泊まり込みで、昼は小道具をつかって、夜は芝居を教えた。升十郎は歌舞伎を教えることには厳しかった。俺がセリフを覚えんもんだから、ツケをひとつ外すと、二階で太鼓を叩いとる升十郎からバチが飛んできた。びっくりこいたなあ。芝居の最中もお客さんが投げた菓子に一万円札が入っていたのを客席に蹴飛ばした。

神山：升十郎さんって何年生れでしたか。

福升：大正二年（一九一三）。だから [大正の「大」と二年の「二」で] 本名が大二なの。

神山：じゃあ、松緑さんと同い年だ。

細江：ここでも一回少女歌舞伎をやったね。教えはじめてから三年くらいたってから。

館野：えー、そんなこともあったんですね。昭和五十五年（一九八〇）くらいですね。

細江：木戸を取って、名古屋の方から [座員を] みんな集めてきて少女歌舞伎だけでやったんだ。これは大したもんだとおもったわ。

最近の活動、子ども歌舞伎

館野：いま、教えてらっしゃるのは白雲座 [岐阜県下呂市門和佐] と鳳凰座 [岐阜県下呂市御厩野] と佐見歌舞伎 [岐阜県白川町] と。

福升：それだけ。

館野：その三か所ですか。ここらへんの芝居〔飛騨地方の地芝居〕と福升師匠が知ってる芝居〔市川少女歌舞伎の芝居〕というのは、結構違ったんじゃないですか。

福升：ここはもう来たときからある程度はできとる。おじいさんとかお父さんがやってるのを見てるからね。前に教えていたところは、芝居を見たことのない子どもばかりだったから、〔『新ノ口』忠兵衛の〕「これ梅川」というのを歌舞伎のセリフのように言わせるのが、三倍も五倍もえらい〔大変な〕んですよ。

神山：芝居のテンポが耳に残ってないんでしょうね。

福升：そう。お客が見て、泣いたり、手叩いたり、拍手が来る、祝儀が飛んでくるようにするには、えらい目したよ。私はよく怒るもんで、嫌われたかもわからない。

神山：あはは。そんなことないとおもいますよ。

館野：僕が前に白雲座に来たとき〔二〇一二年十一月〕には、子どもが『〔伽羅〕先代萩』の御殿と床下〔の場〕をやっていましたね。

福升：〔乳母〕政岡も大分しごいたら、結構上手にやとったわな。〔政岡の子千松を刺殺する敵役〕八汐は小さい子じゃおかしいから六年生がやったんだ。

館野：丸顔で愛嬌のある八汐でしたね。こちらで教えているのは、やっぱり最初のころ〔浜松座時代〕に升十郎さんに習ったような外題が多いですかね。

福升：そうです。でも、歌舞伎というものを知ってるから、セリフまわしをチョッチョツと直したりするだけ。あとは、振りを簡単にやったら、大きくしたり。そういうことは言うけど、ある程度はできとる。

館野：ツケの打ち方なんかは違うんじゃないですか。

細江：俺は升十郎さんにツケを習ったんですよ。

館野：そうなんですか。

福升：この人は、どこへ行っても打てる。

神山：やっぱり根が〔芝居〕好きじゃないとね。

福升：ここはいいですよ。もう半分はできとる。

映画俳優との交遊

館野：余談みたいな話になりますけど、楽屋にはいろんな方がいらっしやいましたでしょう。

福升：中村メイコ（一九三四）さんが来たわ。戦時中、新城〔愛知県新城市〕に疎開してたから、よく知っとるなんて言ってね。

神山：月形龍之介（一九〇二―一九七〇）とか、大川橋蔵（一九二九―一九八四）とか、映画スターも来てたでしょう。

福升：月形先生は京都の少女歌舞伎の後援会長だったんです。芝居を観に来た日は、晩に四条の料亭へ連れてってくれた。橋蔵さんや錦ちゃん〔萬屋錦之介〕も。橋蔵さんの嫁になった真理〔真理子〕ちゃんは藝妓だった。

神山：祇園にいたからね。

福升：じゃんけんして負けると飲んだの。私がトイレに行ったら、酔いつぶれてる子がいて、女中さんに「終わるまで寝かしといて」って頼んだよ。升十郎師匠にみつかるとうぶん殴られるから。まだ、十いくつの子だもの。

日比野：わはは、本当に飲んじゃいけない子だ。

福升：私は負けても飲まんということになってた。『勸進帳』みたいな荒事をしゃべるから、声を痛めるのが怖くて、どこ行っても絶対に飲まなかった。だけど、月形先生が水だって言ったのを飲んだらお酒でね。「何これ、先生！」って。面白い人だったよ。いい人だった。撮影所に行くと、月形先生が扮装して水戸黄門やってて、「中へ入ってこい」って言ってくれる。そうしたら、千恵蔵さん〔片岡千恵蔵（一九〇三―一九八三）〕がおったり、右太衛門さん〔市川右太衛門（一九〇七―一九九九）〕がおったりしてね。

神山：いい時代ですねえ。

福升：うん、紹介してくれてね。太秦の撮影所に行くと、錦ちゃん、東千代之介（一九二六―二〇〇〇）、それから白馬の王子。

神山：山城新伍（一九三八―二〇〇九）のことですね。

福升：名前覚える暇がなかったもんで、白馬の王子って呼んでた。大映へ行けば雷蔵さんがいた。雷蔵さんは寿海さんの息子だからね。

神山：映画がいちばん景気のいい時代でしたからね。その時代にそういう思いをしたっていうのは、本当に羨ましいです。そのかわりに苦労も多かったらうけど。

福升：お囃子部屋の御簾から〔客席を〕覗いて、「あ、東映の連中が来とるよ、今晚お呼ばれだね」って話してた。芝居が済んでから、四条の橋渡ったところの料理屋に行くと舞妓さんも藝妓さんもみんな来とる。橋蔵さんと私が順番になったときに、マリちゃんは自分の彼氏を応援できなくて「福ちゃん頑張れ、福ちゃん頑張れ」って私を応援してね。そ

ういう遊びをしてた。月形先生は笑っとるだけで全然やらなかったね。息子のてっちゃん
は、月形哲之介（一九二六 二〇〇九）って名前だったけど、ええ役につかんもんで、タ
クシー会社をつかって社長になった。

神山：そうそう、ちょい役だけで辞めちゃった。

福升：主役はやらなかったもんね。まず、京都は面白かったね。そういう話ならいくらで
もあるよ。千恵蔵さんはピーンっとしとるのにね、行けばニコニコして。私、すぐ横で写
真撮ったことある。

神山：あのころの人は気風がいいでしょう。錦之介さんにしても、橋蔵さんにしてもね。

福升：そう。歌舞伎から行った人も多いから。

神山：わきまえているからね。お酒飲ませるだけで、それ以上はないから。

福升：私なんかは飲んだ振りしてジャーっと入れるの〔容器〕を女中さんが置いてくれて
ね。どうしても受けなくてはならんときはそれにね〔お酒をあけた〕。

神山：お酒をつぐほうもそれを承知してやるんですよね。ああいうところは男であっても
飲めない人も行って遊ぶ場所だから。

福升：盃を伏せていちゃ失礼だから受ける。それで誰もおらん時にジャーっとあけて、ま
た知らん顔してね。

神山：ところで、映画俳優とは違いますけれど、円城寺清臣（一九〇二 一九七七）さん
って覚えてないですか。

福升：円城寺先生は、よく知っとるよ。写真持って来ればよかったなあ。亡くなりました
か。

神山：もう二十年以上前に亡くなりましたよ。円城寺さんは、帝劇で女優劇をやっていた
から、少女歌舞伎みたいな女性だけのお芝居が好きだったんじゃないかなと思うんですよ
。

福升：円城寺先生は、教わったりじゃないけど、よくご飯を食べに行った。横に並んで、
撮った写真がありますよ。

神山：話好きな人だったでしょう。

福升：そう。劇団をやめてから、劇団の子が二人ばかり円城寺先生を頼って東京へ行った
のよ。それで水商売を紹介してもらって、何年かおったけど引上げて、名古屋へ帰って会
社の事務になった。円城寺先生を知っとるとは知らなんだね。

神山：やっぱり、円城寺さんは帝劇の思い出があるから、女の人が歌舞伎をやるってのが

楽しかったんですよ、きっと。

細江：昔のこと思い出せてよかったなあ。

福升：私、もう二晩くらい寝れなんだ。お話しただけっておもったら、録音もするっていうから、どうしようと思って、久しぶりにドキドキした。芝居を教えるのは楽だけど、こういうことは苦手だもんで。

館野：僕も、福升師匠は〔取材が〕苦手だって聞いていたんですけど、今日は楽しいお話をたくさん聞けました。ありがとうございました。